

ISSN 0910-2396

# 野鳥だより

—北海道—

第 123 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成13年 3月21日

コアカゲラ



2000. 7.10 帯広市 撮影者 石橋 孝 継

〒004-0004 札幌市厚別区厚別東4条2丁目3-1



ゲラのものと思われる採餌痕が針広混交林である彫刻の森のトドマツに見られたそうです。

また、鳥類センサスとは別に、多くの巣箱が毎年5月中旬の道民の森で主催する行事の一環として、神居尻地区の入り口にあたる広場周辺に設置され、これには多くのニューナイスズメが営巣していることが1999年から観察されているとのことでした。

前述の福岡さんの観察は、神居尻地区だけではなく、道民の森全体を対象としたものですが、表に示すように、これまでに72種の鳥が観察・確認されています。ヤマシギ、コノハズク、アオバズク、フクロウ、エゾライチョウ、カヤクグリなどが載っているのは、いかにも「道民の森」という感じです。また、過去には水域でシノリガモとカワアイサの繁殖が確認されたとのことで、極めて貴重な記録といえましょう。

今回、探鳥地紹介ということで取り上げましたが、実は道民の森は「探鳥発展途上地」なのです。早朝はもちろん

たくさんの鳥たちに出会えるでしょうし、夜にはフクロウたちの声が聞かれることでしょう。この記事をご覧になって多くの方が道民の森にお出かけになって、「道民の森探鳥報告」をお寄せいただけることを願っています。その他詳細については道民の森管理事務所(☎01332-2-2151)にお尋ね下さい。

今年の野鳥観察会の予定は下記のとおりです。

**道民の森探鳥会**  
 平成13年5月27日(日)午前6:30から2時間程度  
 集合場所: 神居尻地区総合案内所前  
 当日は日本野鳥の会室蘭支部の方々も参加予定です。  
 なお、現地の施設にて前日からの宿泊もできます。  
 宿泊等についての詳細は道民の森管理事務所  
 (☎01332-2-3911)にお尋ね下さい。

文責: 広報部

科名	種名	平成11年度調査			野鳥観察会 資 料
		6月	8月	10月	
サギ科	アオサギ				○
カモ科	オシドリ				○
	ヨシガモ				○
	シノリガモ				○
	カワアイサ				○
タカ科	トビ	○	○		○
	オオタカ				○
	ノスリ				○
ライチョウ科	エゾライチョウ		○		○
シギ科	ヤマシギ				○
ハト科	キジバト	○	○	○	○
	アオバト	○			○
カッコウ科	ジュウイチ				○
	カッコウ	○			○
	ツツドリ	○			○
フクロウ科	コノハズク				○
	アオバズク				○
	フクロウ				○
アマツバメ科	ハリオアマツバメ				○
	アマツバメ				○
キツツキ科	ヤマゲラ				○
	クマゲラ				○
	アカゲラ	○	○	○	○
	オオアカゲラ			○	○
	コゲラ	○	○	○	○
ヒバリ科	ヒバリ				○
ツバメ科	イワツバメ				○
セキレイ科	キセキレイ	○			○
	ハクセキレイ	○			○
	セグロセキレイ				○
	ビンズイ				○
ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○	○
モズ科	モズ				○
ミソサザイ科	ミソサザイ				○
イワヒバリ科	カヤクグリ				○
ツグミ科	コマドリ				○
	コルリ	○			○

科名	種名	平成11年度調査			野鳥観察会 資 料
		6月	8月	10月	
ツグミ科	ルリビタキ	○		○	
	トラツグミ	○			○
	クロツグミ	○	○		○
	アカハラ	○			○
	マミチャジナイ			○	○
	ツグミ				○
ウグイス科	ヤブサメ	○			○
	ウグイス	○	○	○	○
	エゾセンニュウ				○
	エゾムシクイ				○
	センダイムシクイ	○	○	○	○
	クイイタダキ	○		○	○
ヒタキ科	キビタキ	○	○		○
	オオルリ	○			○
	サメビタキ				○
	コサメビタキ		○		○
エナガ科	エナガ			○	○
シジュウカラ科	ハシブトガラ	○	○	○	○
	コガラ			○	
	ヒガラ	○		○	○
	ヤマガラ				○
	シジュウカラ	○	○	○	○
ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ		○	○	○
キバシリ科	キバシリ			○	○
ホオジロ科	ホオジロ	○	○	○	○
	カシラダカ			○	○
	アオジ	○	○	○	○
	クロジ	○		○	○
アトリ科	カワラヒワ	○	○	○	○
	ベニマシコ	○	○	○	○
	イカル	○	○		○
	シメ	○		○	○
ハタオリドリ科	ニューナイスズメ	○	○	○	○
ムクドリ科	コムクドリ				○
カラス科	カケス			○	○
	ハシボソガラス	○			○
	ハシブトガラス	○		○	○

## シラミバエとの出会い

利尻町立博物館学芸員 佐藤 雅彦

岩波生物学辞典(第4版)によれば、『寄生』とは「共生の、ふつうはそれによって寄生者が利益を受ける片利共生の一形態」と書かれています。考えてみれば、これほどお気楽な生活はありません。できればあやかりたいと思うものの、「寄生する相手がだめになっちゃったらどうしよう・・・」「衣食住は満ち足りたが、はて何をして人生、楽しむべきか・・・」と小市民の私には、汗水、鼻水たらして生活する方が安心といえば安心かも・・・。

そんなうらやましい(?)寄生虫にいつのまにか心ひかれていた私ですが、そのことに気づいたのはだいぶ最近のことです。思い出すと学生時代によくながめていた昆虫図鑑に、すでにその予感がありました。ハエの図鑑のうしろの方の図版をみていると、なにやらとてもハエには見えない写真が掲載されています。たとえば学研の生物図鑑。「ヒツジシラミバエ」「シカシラミバエ」「アオバトシラミバエ」「カノウコウモリバエ」「ケブカクモバエ」などの写真を見ると、彼らは翅がなくなっていたり、体が扁平になり、食卓の周りをうるさく飛び回るいつものハエとは著しく変形した身体を持っているのです。これらのハエたちは哺乳類や鳥類に寄生する不思議な生活を送っているグループで、このハエたちを見た時の不思議な魅力、それがどうも私の「寄生虫」への憧れの始まりだったようです。外国のハエの文献を見ると、精密なスケッチでそれらのハエが描かれており、その芸術的ともいえる不思議な形態は、私の心にますます刻みつけられました。「動物に寄生しているハエを実際に見てみたい!」といつの間にか思うようになった私。しかし、当然のごとく、そんなハエが自分の弁当箱の卵焼きにたかっているなんてことは万に一つもありません。まず鳥や哺乳類を捕まえてなくては、そこに寄生するハエを見ることできないわけですから、なかなかその願いはかなえられずにいたのです。

学生時代が終わり、利尻島に就職でやってきた私。この最果ての地で、忘れかけていた私の願いはあっけなくかなうことになりました。それは傷病鳥獣保護などで鳥の持ち込みが多い職場だったため、鳥類に寄生するシラミバエ科(Hippoboscidae)のハエと出会う機会が増えたからです。

現実の世界で動くシラミバエを見た時は、背筋が寒くなるほどの驚きでした。なぜって、図鑑の写真で見慣れたシラミバエは、華奢でのろのろと鈍そうなハエとっていました。しかし、寄生している鳥の羽毛の中を縦横無尽に素早く動くその姿は、なんの基礎知識もない人が見たら、気

絶するぐらい不気味さを持ちあわせているのですから。多くの昆虫たちの動きの基本は、体の線に対して前後に動くのが基本です。しかし、シラミバエたちの動きを見てみると、すばやい横移動を行うことができ、それが不気味さの原因の一つとなっているようでした。この動作の俊敏さは、寄生する鳥たちからの攻撃を避けるために身に備わったものではないかと思っていますが、サルなどはお互いに毛繕いをしますが、鳥でもその行動が発達したら、彼ら寄生バエも危ないかもしれませんね。

さて、日本にはこのシラミバエ、どれくらいの種がいるのでしょうか?「日本産昆虫総目録」(平嶋、1989)によると、シラミバエ科は23種が国内で記録されています。この文献はおおまかな分布域も記してありますが、北海道での記録が確実なのはハトシラミバエ *Ornithomya avicularia aobatonis* (Matsumura, 1905)のみです。亜種名からするとアオバトから初めて採集されたようで、別の文献からはハシブトガラス、キビタキ、アホウドリからも見つかるようでした。北海道での記録の内訳(Maa, 1967)をみると、ハイタカ(no data)、ホオアカ(真駒内、1934)、人間の腕(空沼、1963;これは偶然飛んできたのでしょうか)、セグロセキレイ(トビニタイ、1960)、ツミ(糠平、1955)、シマアオジ(礼文、1955)、アオジ(〃)、コマドリ(〃)、カワガラス(白川、1918)、ホオジロ(〃)からの採集でした。どうもこのハエは、アオバトだけに寄生しているものではないようです。

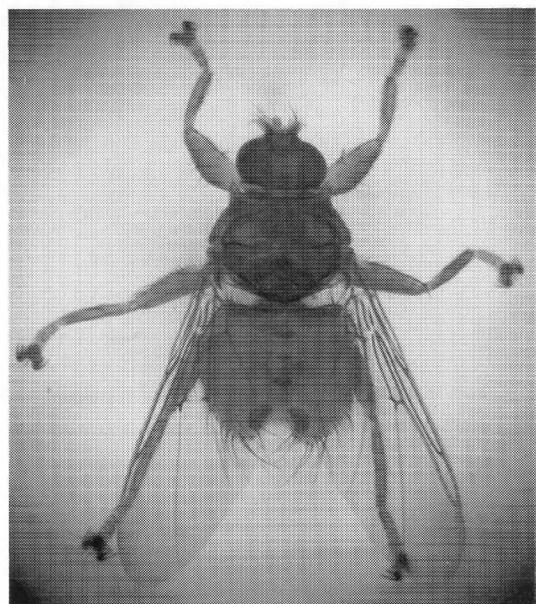


図1. ハトシラミバエ

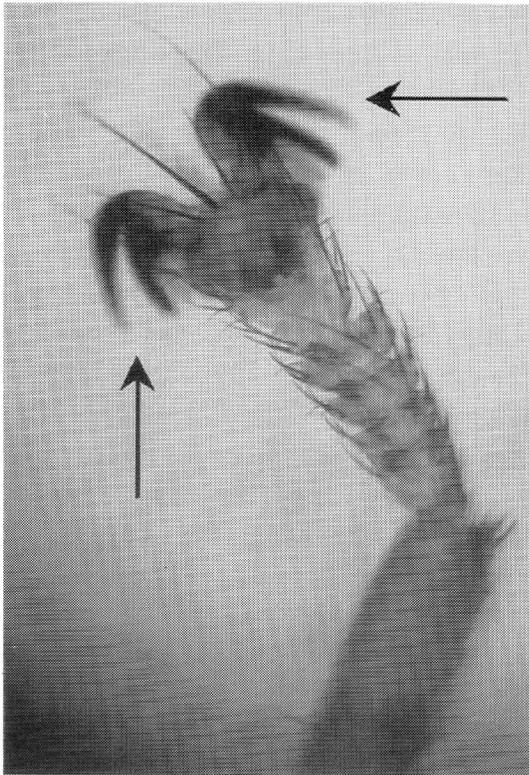


図2. 頑丈な爪 (ハトシラミバエ、  
腹面から撮影、矢印が爪)

そこで、手元にあった検索表でこのハトシラミバエを早速利尻の標本で探してみることにしました。アオジ、コマドリなどに見当をつけて似たような種を探していったのですが、どれも *O. fringillina* などの別種ばかり。もうあきらめようかと思った時、やっと見つかったのが、なんと1997年に保護したクマガラから採集したものでした。図1にその全体写真を載せました。押しつぶされたように扁平な体、頑丈そうな爪(図2)、これらはシラミバエ科の大きな特徴といえそうです。ハトシラミバエは立派な翅を持っていて飛ぶことができますが、飛ぶことが必要なくなり、翅が退化してしまった種もあります。そのようなシラミバエで有名なのがイワツバメシラミバエかと思われます。みなさんもどこかで名前を聞いたことがあるのではないのでしょうか？残念ながら私は今まで生きてきた個体を見たことがないのですが(イワツバメは保護したことないのです)、去年は2個体もそのハエの標本を見る機会に恵まれました。その翅は針のように細くなり、これではもう飛ぶことは不可能です(図3)。このような状態がさらに進むと、コウモリに寄生するクモバエのように、全く翅がなくなってしまう

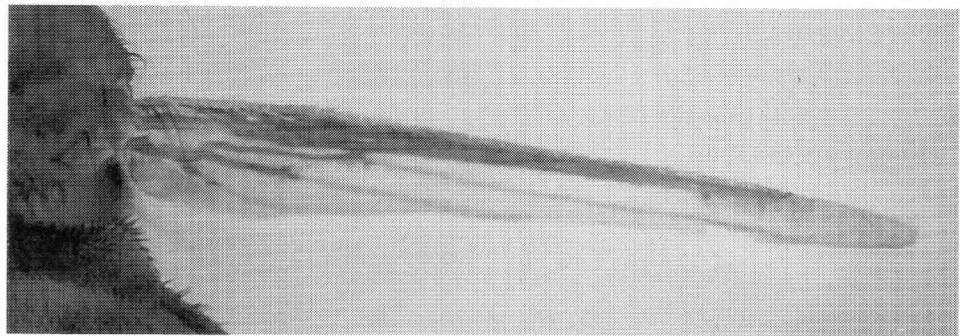


図3. イワツバメシラミバエ

ようになるのかもしれませんが。

さて、みなさんもだんだんシラミバエ、興味が湧いてきたのではないのでしょうか？北海道からのシラミバエの記録は多くないようですので、ぜひ保護した鳥や死んで間もない死体などがありましたら、「シラミバエ、いないかなあ〜」と探してみてもいいのではないでしょうか？なんか気持ち悪いなあ〜なんて思っている人も多いでしょうね。シラミバエの採集は「さあ、今から採集するぞ！」という心構えや準備が出来ていない時に限って、突然、ケガした鳥が持ち込まれ、「あっ、なんか今飛んだっ！ハエ？ハエ！ひえ〜、それ捕まえて〜」なんてことになることが多いのです。それだけに採集に関してはいろんな出来事がありました。

ある時、ケガした鳥が持ち込まれ、その処置が一段落ついたのでトイレへ。チャックをあけてしばらくすると、なにか腕にピトッとついた気配が……。よく見るとなんとシラミバエではありませんか！多分、鳥から飛び出したシラミバエが私にくっついてトイレまで来ちゃったのでしょう。手を出しようにも手を出せない状態でありました……。

また、ある親子がガラス窓にぶつかって動けなくなってしまった鳥を大事そうに持ってきてくれた時のこと。博物館のロビーで心配しながら段ボール箱の鳥をながめる親子の横で、私も鳥をのぞきこもうとした瞬間、なにかが飛んだではありませんか！「む！ハエ？」と私は全神経を周囲に注ぎ、どんな動きも見逃さないといった顔つきになりました。すると、足下からまたなにかが動いて、床にとまったではありませんか！「はっ！」という掛け声とともに手づかみをしようも、敵もさるもの、間一髪のところを手をすり抜けました(翅が退化しているグループは別ですが、ちゃんとした翅を持っているシラミバエは、その辺のハエと同じように素早く飛ぶことができます。屋内でも一度鳥の体から離れたハエは、見つけるのが非常に困難になって

しまいます)。が、そんなことであきらめる私ではありません。数回のチャレンジの結果、その手にシラミバエをにぎりしめ、受付の人に「ビニール袋、持ってきて！早く！逃げちゃう〜」と叫んでいました。しかし、あっけにとられたのはその親子でした。鳥をみてもらえるものと思っ

てきたら、突然、その学芸員が床の上を数度カエル飛びしたあげく、なにもいないような空間に向かってパンチを繰り返りだし、こぶしを突き出し、さも「やったあ！」という笑顔で「ビニール袋！」を連呼するのですから・・・。事情を話したら大笑いしてくれました。

このようにシラミバエは死んで体温が低下してきた鳥などから離れて、別の寄主を見つけるようなのですが、そんな時、そばにいる人間の腕で一休みすることも多いようです。私も何度も腕に留まりましたが、彼らの独特な「ピタッ、ツツツツウ~~~~」という動きはなかなか慣れないものです。腕に留められた驚きを心の奥にねじ込み、すばやく、かつ、つぶさないようにやさしくハエを掴まなくてはなりません。採集したハエは、「採集場所」「採集年月日」「採集者」「鳥の名前」などを書いた紙切れと共に、フィルムケースに入れて冷凍庫などにいれて保管するのが簡単です。なお、死体からシラミバエが見つかることはほとんどないのですが、もし野生動物の死体などを扱うとき

は必ず手袋などをするようにしましょうね。

以上、ながながとシラミバエのお話をお聞き下さり、ありがとうございました。「ハエなんて・・・」と思う方も多かったと思いますが、人間にとっての地球と同様、寄生するハエにとっては、まさに鳥の身体が彼らにとってのかけがえのない地球みたいなものではないかと思われまます。我々の地球と同様、そんな小さなハエたちの地球がいつまでも美しく輝いていられることを望まずにはいられません。最後になりましたが、この原稿の掲載の機会を与えてくださったことにお礼申し上げます。

#### 参考文献

平嶋義宏(監修)、1989. 日本産昆虫総目録. 九大農学部昆虫学教室、福岡。

Maa, T. C., 1967. A synopsis of Diptera Pupipara of Japan. Pacific Insects, 9:727-760.

〒097-0311 利尻郡利尻町仙法志字政泊

## 北海道における繁殖期のハシブトガラスの分布

藤 卷 裕 蔵

野鳥だより121号で、カケスの分布について紹介した。今回はハシブトガラスである。多分、ハシブトガラスというと、「どこにでもいる鳥ではないか」と思っている人が多いであろう。しかし、北海道各地で鳥の調査をしていると、ハシブトガラスに出会わないこともあるし、生息していても環境によって多かたり少なかったりする。

そこで、具体的な観察記録に基づいて、分布、環境ごとと標高ごとの生息状況について述べてみたい。使用したデータはおもに前回と同じく自分で調査した観察記録で、データのない部分についてはこれまでに発表された論文や調査報告書、日本野鳥の会の各支部の支部報の記録(1970年代以降)からの記録を利用した。

### 分 布

分布の表示方法は前回と同じで、10km四方(1/25000の地形図に相当)の区画を単位にし、図では○または●一つで示した。

図1は、10km四方の区画を単位として繁殖期のハシブトガラスの分布である。所々で観察できなかった区画があるが、調査・観察の記録のある区画では、ほぼどこでも観察されている。観察されなかった区画は散在しており、分布図を見る限りでは一定の傾向は見られない。ただし、北海道北部、渡島半島、オホーツク海側では観察があまり行わ

れていないため、または発表された記録が少ないため、空白部が多い。

### 生息環境

自分で調査したのは457か所である。それらの生息環境を、ハイマツ林、常緑針葉樹林(人工林も含む)、針広混交林、落葉広葉樹林、カラマツ人工林、農耕地・林(観察路沿いの環境の20%以上が林地の場合)、農耕地、住宅地の8つに区分した。

ハシブトガラスは、区分した全ての環境で観察されているが、出現率は森林のうちハイマツ林とカラマツ人工林で他の3タイプの森林よりやや低かった(表1)。森林以外では、農耕地・林と農耕地で50%以下であったが、住宅地ではかなり高かった(表1)。一般にハシブトガラスは森林性といわれているが、この調査結果でも出現率が農耕地より森林で高く、「森林性」を裏付けている。しかし、住宅地で多いのはどういうわけであろうか。これまでの住宅地での調査によると、ハシブトガラスの数が多いのは、都市繁華街でごみが路上に多く出されている所であった。「出現率が高い」といっても、これは住宅地を、「食・住」の生活基盤にしているということではなく、「食」を得るために飛来しているだけのようである。

標高別でみると、ハシブトガラスはどの標高帯でも観察

されたが、出現率は標高600m以上になると、低くなる傾向があった。しかし、営巣しているとは思えないようなハイマツ帯にも飛来することがある。これは、多分餌を求めて飛んで来るとおもわれる。ハシブトガラスは、食物を求めて平野部の住宅地だけではなく、高山帯にも飛んでおり、日々の生活でもかなり広い範囲を飛びまわっていることがわかる。

ハシブトガラスは、前回に紹介したカケスの場合に比べると、森林性であるとはいっても、カケスほど森林に強く依存している種ではないといえるだろう。森林を拠点にし、そこから日常の生活する範囲を広げ、繁栄している鳥である。

〒080-8555 帯広市稲田町西2-11

帯広畜産大学野生動物管理学研究室

表1. ハシブトガラスのの生息環境別・標高別の出現率

生息環境	調査 路数	標 高 (m)						計	
		101~ ~100	201~ 200	301~ 300	401~ 400	501~ 500	601~ 600		
ハイマツ林	10	-	-	-	-	-	40	40	
常緑針葉樹林	10	-	50	100	100	100	-	100	90
針広混交林	91	80	64	67	40	58	67	35	55
落葉広葉樹林	74	54	55	82	82	80	100	0	69
カラマツ人工林	17	50	33	50	67	33	-	-	47
農耕地・林	110	49	40	50	43	0	-	0	45
農耕地	131	45	42	24	58	-	100	-	43
住宅地	14	90	100	100	-	100	0	-	86
計	457								



図1. 北海道における繁殖期のハシブトガラスの分布。  
 一つの区画は、約10km四方で、1/25000地形図に相当する。  
 ●=生息が確認された。○=調査したが、観察されなかった。  
 ·=未調査の区画。

## 北海道における海鳥繁殖地の現状

綿 貫 豊 (北海道大学大学院農学研究科)

北海道沿岸は多数の海鳥が繁殖する、日本でもっとも海鳥相が豊富な地域であることは意外と知られていません。岸からではごく限られた海鳥しか観察できませんし、長距離フェリーに乗る機会がそう多いわけではありません。ましてや、海鳥が多数繁殖する無人島をおとずれるチャンスはまずないでしょう。北海道周辺に多数の海鳥が繁殖するのは、寒流と暖流が混合するため、海洋生産力が高く、そのため餌となる魚がたくさんいるからです。縄文人がアホウドリやウミガラスを大量に食料としていたことからわかるように、北海道沿岸の海域は古くから人間と海鳥が深くかかわりあってきた場所です。ところが、この関係は最近時として深刻なものにもなっています。3年前の島根沖でおきたナホトカ号の重油流失事故で多数のウトウが死亡しましたが、その一部は天売島で繁殖した個体であることが足輪からわかりました。また、昨年夏には北海道北部や東部で多数のウトウの死体が漂着しましたが、その死亡原因は今だ説明されておらず、餌不足による餓死や漁網にからまっての死などが疑われています。今年の夏は襟裳を中心とした海岸にミズナギドリ類の死体が漂着しましたが、これは漁網へのら網が原因であることが報じられています。

私が最も親しんでいる天売島は、古くから人が住んでいる一方で、8種類の海鳥が繁殖している、世界的にも貴重な島です。特に、ウトウは全世界の30%近くが繁殖する世界最大の繁殖地ですし、極東地域にのみに分布するケイマフリの我が国最大の繁殖地のひとつでもあります。しかしながら、彼らの個体数は歴史的に大きく変化しており、その原因の一部は人間活動によるものです。ウミガラスとケイマフリは年10%以上の非常に高い率で減少し、現在の繁殖番数は10のオーダーにすぎず、地域個体群の絶滅が危惧されています。その原因は、ら網による成鳥死亡率の増加であると考えられており、また近年ではオオセグロカモメ、カラス類による捕食が巣立ち数減少の原因となっています。一方、同じくウミスズメ科に属するウトウは、その繁殖数推定に大きな誤差をとまっていますが、営巣数は増加しているようです。ウミスズメの繁殖数はせいぜい10のオーダーとかなり少ないため、繁殖場所の崩壊やら網など突発的な事故によって地域個体群の絶滅の危険性があります。ウミネコの繁殖数は1980年代は2万ペア程度で若干増加していましたが、1990年にはいってその数は半減しました。その原因のひとつは人間が持ち込んだネコによる攪乱です。ネコはウトウやウミネコ雛、時には親鳥も捕食し、繁殖地

内に侵入した場合、周辺個体もふくめて大きな攪乱をおこなっています。

このような海鳥の繁殖個体数変動をもたらす要因はおおきくわけて次の二つです。ひとつは、彼らの越冬場所や採食場所である海のうえで働く要因であり、海洋生物資源変動、漁業による餌生物資源の枯渇、刺し網、生え縄漁業による混獲、タンカー事故などによる油汚染や日常的な農薬や排水による海洋汚染が含まれます。これらの解析とそのコントロールは困難ですが、成鳥生存率と巣立ち後の幼鳥生存率に大きく作用し、海鳥の個体数変動をもっとも大きく左右します。海鳥と漁業との関わりは長い歴史を持ち、漁師は海鳥を追うことで魚の群を見つけていました。しかし、その関わり方は、漁業の方法の変化に伴って急速に多様化し、また、漁業活動の活発化・大規模化によって、海鳥にとって時には深刻なものになってきています。もうひとつは、繁殖場所であるコロニーで働く要因であり、自然および導入された天敵による捕食、自然災害による繁殖地の消滅、導入された動植物による繁殖ハビタットの消滅、人間による卵、雛、親鳥の採取などが含まれます。これらの繁殖地に関わる要因の分析は比較的容易で、コントロールしやすいと思われます。

私達は今天売島で、海洋生物資源の年変動が海鳥たちの生活にどう関わっているか、を中心に研究しています。まだ研究途中ですが、油分の多い、海鳥にとっては手ごろな大きさの、カタクチイワシやイカナゴが豊富な年には近くで多くの餌を得ることができるので、繁殖成績がよいらしいことがわかってきました。このようなベースラインデータをj得ることで、人間によるインパクトをよりよく検出することができます。例えば、油汚染が繁殖個体数にどう影響するか科学的に判定するためには、汚染のおこる前とあとで比較しなくてはなりませんし、そのときの餌環境がどうだったかを考慮する必要があります。油流失事故がおこってから調査したのではその被害を客観的に判断することはできません。陸に住む人間にとってはそれほど気にとめない海鳥の世界を支える沿岸海洋環境にいま大きな変化が訪れており、それはいずれ漁業活動や汚染を通じてわれわれにはねかえってくることを忘れないようにしたいものです。

新年講演会(札幌市女性センター・平成13年1月13日)でお話いただきました。

〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目

北海道大学大学院農学研究科

## 測量山のホーク・ウォッチング

本 多 進

鳥はいつの頃から渡りをするようになったのでしょうか。標高200mの測量山、渡りの中継地として知られるようになったのはごく最近のことですが、鳥は悠久の昔からこの山を南北交流の道しるべにしていたのです。

山は人にとっても鳥にとっても聖地なのです。

さて、測量山のワシタカですが、昭和56年以降の観察によるもので、詳しいデータを取ることは出来ませんでした。渡りの傾向について大まかなことが解ってきました。

渡りは春と秋に見られますが、春はあまり目立たないで観察も手薄になっています。9月に入るとタカの姿がチラホラ目につくようになり、20日前後に、まずハチクマのピークがあります。数は大ざっぱにみて多い日で、50～100羽、シーズン中の総数は、1000羽以下と推定しています。ハチクマの渡りは短期間に集中しますので観察のタイミングが肝心です。

なお、ハチクマの識別で気を付ける事は、大きさではオオタカやノスリより大きく、“くび”が少し長く見えること、色合いには茶色型や黒色型がありますが、黒っぽく見えるものが多いようです。

次にノスリです。シーズン中は満遍なく見られますが、10月・11月に特に多く全体の半数を占めるようになります。多い日には数100羽に達することもあり、シーズン中の総数は、2～3000羽になるものと思われま

す。ノスリはトビに次いでポピュラーなタカです。識別入門にも適していますので、探鳥の折には図鑑と首っぴきで観察してみましょう。逆光に白く透る“つばさ”には何とも言えない美しさがあります。

11月に入ると、トビの姿が目立って多くなり12月まで続きます。トビは、いちばん数も多く珍しくもありませんが、タカの識別の基準になりますから、しっかり覚えておきましょう。“く”の字型の翼と三味線のバチのような尾羽根に特徴があります。

あれは5・6年前の12月のある日、測量山のテレビ塔上空にタカとおぼしき大群を発見、双眼鏡でのぞくと、なんと1000羽を越えるトビの超大群ではありませんか、蚊柱ならぬ特大のタカ柱にびっくり仰天したことがあります。後にも先にも一度きりの事で、幻を見たのでは？と思えるほどです。

ところで、トビの渡りで解らない事があります。同じ時期に噴火湾を逆に渡ってくる群れがあるのですが、本州から来るものかどうかまだはっきりしません。

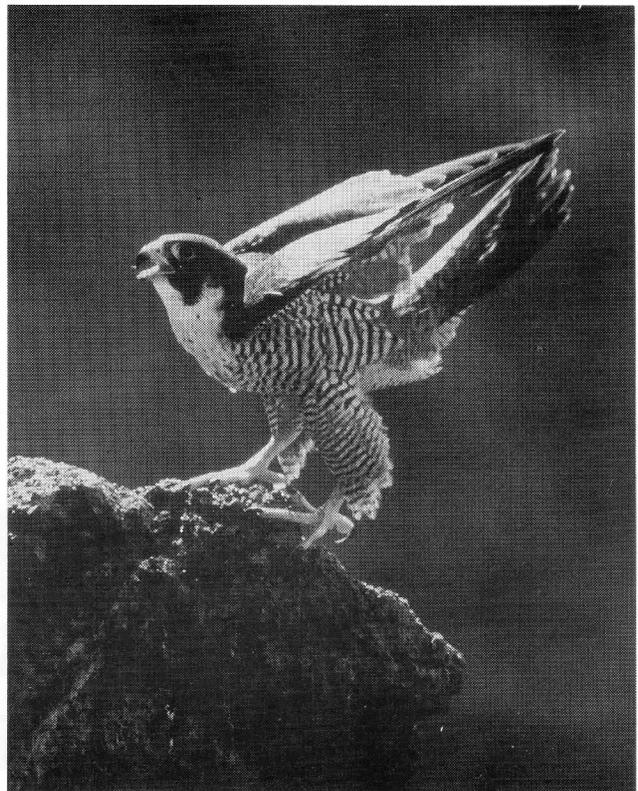
オオタカ、ハイタカ、ツミ、この3種については、群れをつくることはほとんど無く、単独行が多いようです。シーズン中はほぼ毎日見られますが、多い日でも20～30羽、シーズン中の総数はそれぞれ1000羽程度でしょうか。

その他のワシタカについては、クマタカ、ミサゴ、ハヤブサ、チゴハヤブサ、チョウゲンボウ、チュウヒなどが少数ながら観察されます。

12月・1月には北からオオワシ、オジロワシが渡ってきます。特筆されるのは、イヌワシです。1987年(昭和62年)10月市民探鳥会の折りも折り、一羽の若鳥が現れ大勢のバードウォッチャーを唸らせました(最近の調査で、北海道でのイヌワシの生息が確認されました)。

秋の渡りは、ワシタカに限らず、ほとんどが若鳥で占められ、北海道から旅立つ鳥たちは何百万羽にも達します。しかし、来春、無事故郷に帰りつくのは、わずか20%位とも言われています。春の渡りが目立たないのは、そう言う自然界の事情があるのです。改めて鳥たちに声援を送りましょう。

〒051-0005 室蘭市新富町1-8-12



ハヤブサ

## 鵠川町～浜厚真を採餌利用する雁たち

～ 2000年春の観察記録から～

佐藤 ひろみ

短い夏にロシアのカムチャツカ半島などで繁殖したマガンやヒシクイたちは毎年、9月10月になると次々と北海道へ南下し始めます。主にサロベツや十勝、美唄の宮島沼などで羽を休めた後、本州の越冬地へ続々と渡っていきます。勇払郡鵠川町や厚真町の田や畑、牧草地は雁の採食地として利用されている地域ですが、春と違って秋には雁の行く手をさえぎる積雪がないためかどんどん南下し、秋にはほとんど雁の姿を見かけません。

冬の間、宮城県の蕪栗沼や伊豆沼、新潟県の福島潟、滋賀県の琵琶湖などで越冬していた雁たちは、雪融けを待って北上を開始します。秋田や青森を通過し、そして、北海道のウトナイ湖、弁天沼、鵠川町などへ北上する雁の第一陣がやってくるのです。鵠川での初飛来はその年の積雪状況にもよりますが、だいたい2月下旬くらいでしょうか。つまり、北海道への初上陸地として鵠川や厚真の田や牧草地は、雁にとってはなくてはならない存在なのです。近年では静内町で越冬する個体群も若干報告されており、厳冬期に鵠川でそれらの群れを観察することもあり、両町を移動していることが推察されます。

ウトナイ湖や弁天沼をねぐら利用している時季、鵠川や厚真、植苗などが主な採食地となり、この地の田や畑、牧草地に降り立って、無心に落ちモミや草を食べている姿を見かけます。このことは多くの鳥見人に知られていますが、開発工事に先立った動植物に関する環境調査はなされているのでよしが発表されておらず、具体的なデータを知ることができませんでした。今回、2000年春期の鵠川町～浜厚真における雁の渡来状況を知り得たので簡単にご紹介いたします。

知り得た範囲では、3月4日にマガンを初確認しました。2000年は鵠川では例年にない積雪のためわずかな畦が見える程度で、以後しばらくは小さな家族群に分散しての採餌風景が続きました。3月23日、25日、26日、30日、4月1日、6日と鵠川から浜厚真にかけての田、牧草地などにいる雁の数とその位置を調べました。3月25日約6500羽、30日約10000羽、4月1日約7000羽の雁をカウントしました。雪融けに伴い、鵠川平野部から山麓のほうへ、そして厚真町へと移

動していきました。特筆すべき点は、図に示すとおり日高道（高速道路建設中）の沿線に多数の雁が観察されたことです。また、鵠川・厚真両町で、ハクガン3羽、シジュウカラガン7羽の他、カリガネ、標識首輪をつけた雁18羽をも観察しており、雁の中継地として重要なことが示唆されます。

この鵠川の水田地帯を横断するかたちで建設中の高速道路が開通するに伴い、交通量が増えることが十分予想され、雁の採餌地も分断されることとなります。田の中央に道路が1本通ることによって雁たちは安心して採餌できなくなるのです。先の、宮城県でも高速道路開通に伴い、雁が飛来しなくなったという山田町の事例もあり、マガンたちがこの鵠川を採餌利用できなくなるのでは…と危惧されます。雁を観察・撮影するときも畦などに入らずマナーを守って、やさしい気持ちで見守ってほしいと感じています。

〒062-0934 札幌市豊平区平岸4条2丁目

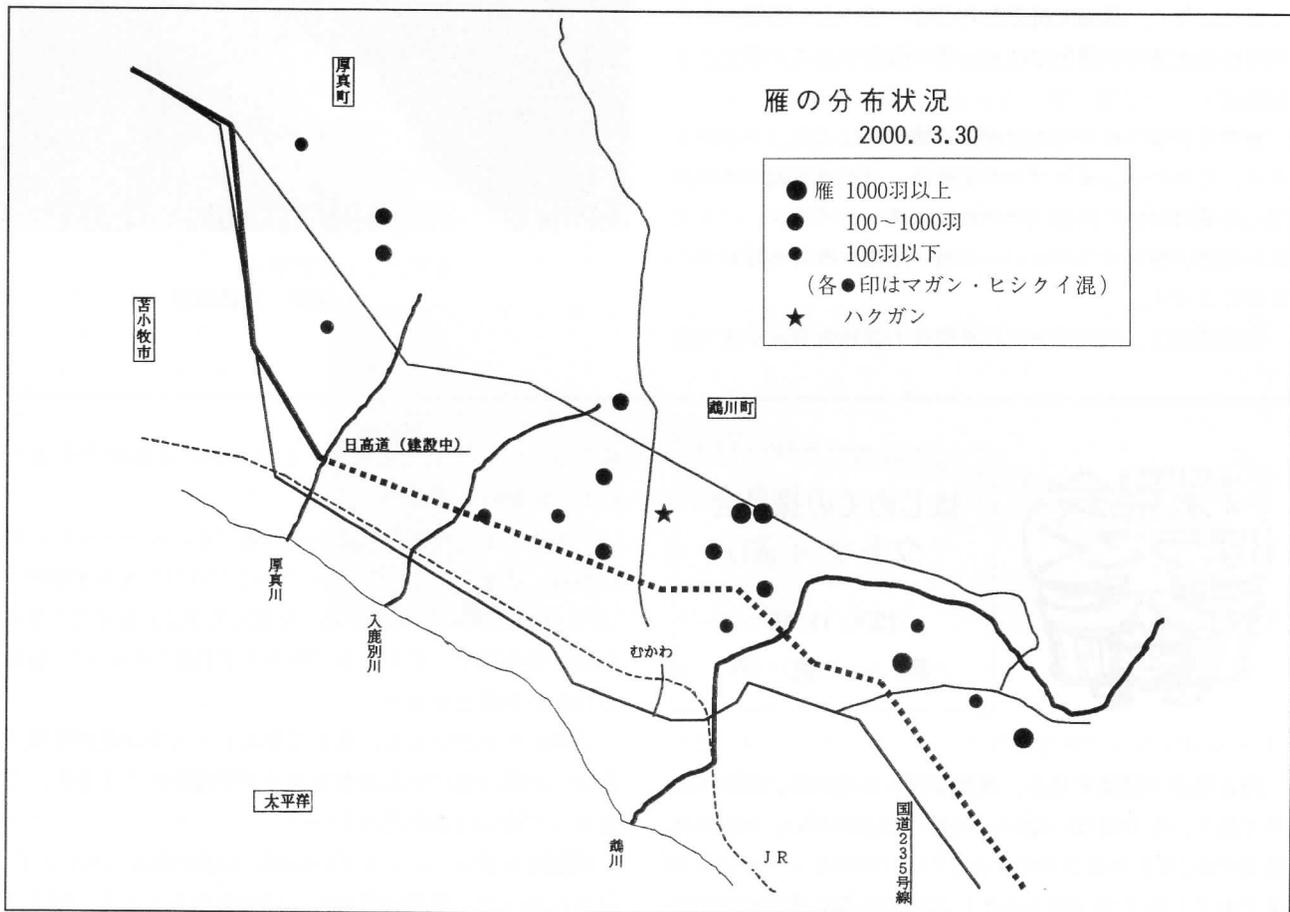
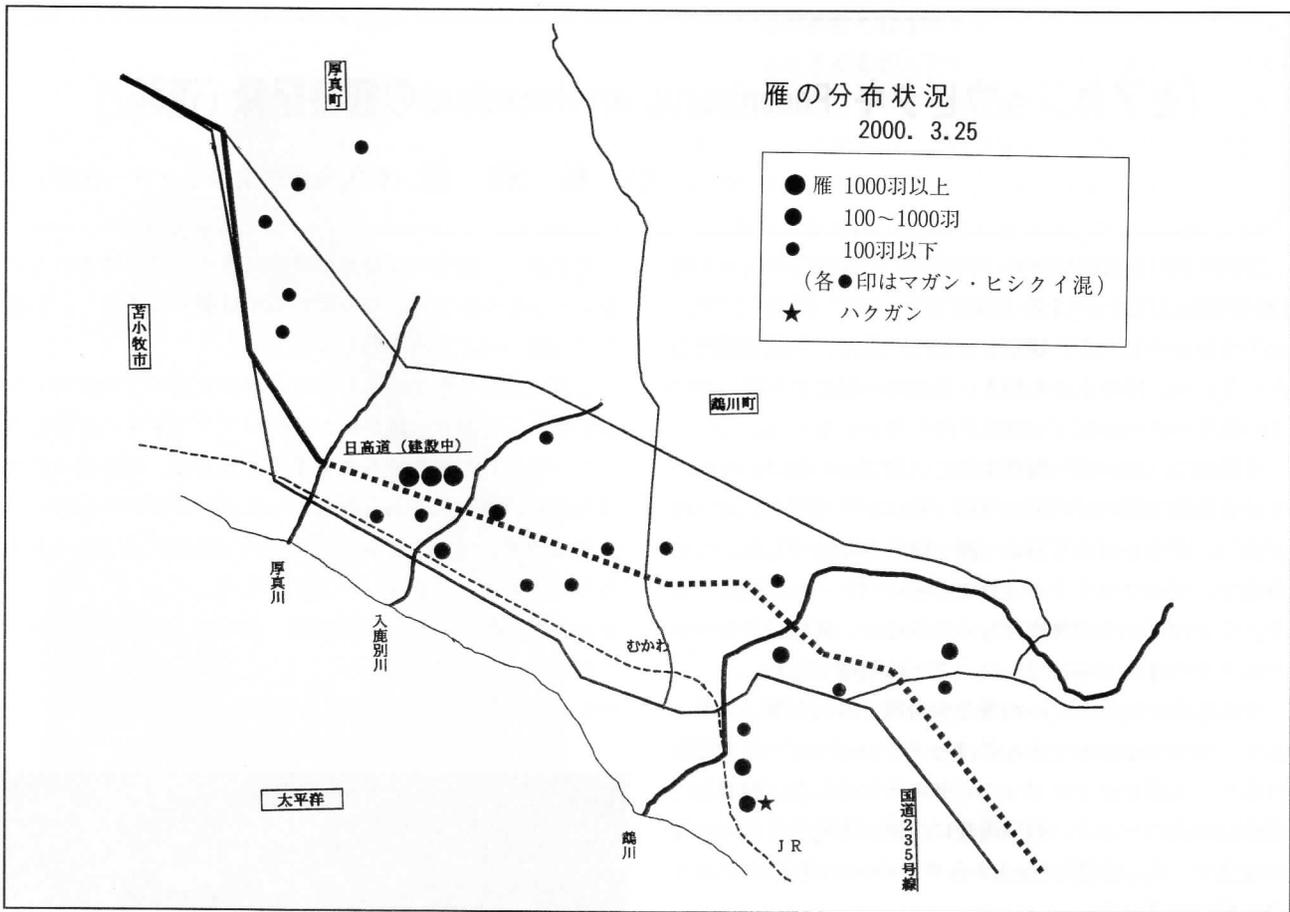
3-15-A-205



写真1. 2000年3月26日浜厚真にて。ハクガン若1羽（背後に建設中の日高道高架が見える）



写真2. 2000年3月25日鵠川町にて。雁約3000羽が採餌。（背後に建設中の日高道高架が見える）



## 「セアカジヨウビタキ *Phoenicurus erythronotus* の観察記録 (速報)」

小杉和樹 (利尻島自然情報センター主宰)

2000年10月21日午後2時、利尻富士町鬼脇のヤムナイ沢(標高250m付近)の川原(E141°17', N45°9'30")で、セアカジヨウビタキを観察しました。最初、肉眼で観察したときには、尾の上下の動き、飛翔時の尾羽から腰にかけての色彩パターンはジョウビタキと思われました。

双眼鏡で(10×40)観察すると、頭部から後けいにかけては青灰色で嘴の付け根から頬・首にかけて黒くて太い線があり、背中と喉から胸まで腰と同じ赤錆色でした。この時点で、ジョウビタキとは背中と喉のパターンが違っており、ジョウビタキの雌雄どちらでもなく、同様にクロジョウビタキの雌雄どちらでもないことは明確でした。

翼の色彩を見ると、小雨覆と中雨覆、初列雨覆に白斑があり、背中が赤錆色であるのはセアカジヨウビタキの特徴であり、本種をセアカジヨウビタキとしました。観察した個体は前述のとおり、初列雨覆に白斑があることから雄の成鳥で、換羽状態はfreshからややwornへ進んでいるものと思われました。

観察中、セアカジヨウビタキは、あまり人を恐れるような感じがなく、地面で餌をとり、時々石の上や川原にある木の枝に止まり、最短では8m程で観察することができました。

セアカジヨウビタキの分布は、繁殖期は天山、タルバカタイ、アルタイ、モンゴルの北西部、バイカル湖の南西部で、冬期はロシア南部、アフガニスタン、イラン、パキスタン北部、西ヒマラヤといった短い距離を西方へ移動するとのことです。

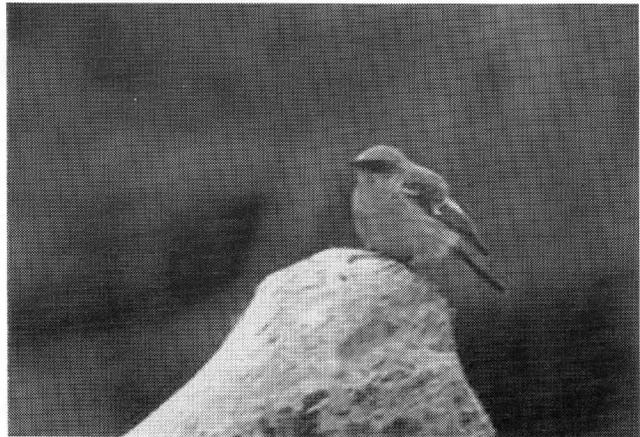
生息環境は、低中緯度の針葉樹林の森林限界近くまで達

しますが、一般的には低地の疎林に多く、時には木の育たないところや混交林、やや背の高い低灌木に生息し、石混じりの乾いたところを好むようです。

日本で確認されているジョウビタキとはバイカル湖で分布が重なっており、越冬のためのジョウビタキと行動を共にし、迷行した可能性もあります。当日は、晴れ時々曇りの天候で、やや風がある程度でしたが、数日前の10月18日前後は12月上旬並の寒気団と冬型の気圧配置で平地でも初雪を記録する、荒れ模様の天候でした。

\*観察者：小杉和樹、佐藤雅彦(利尻町立博物館学芸員)、坂本里恵(野鳥の会)

〒097-0401 利尻郡利尻町杓形字富士見町



セアカジヨウビタキ  
撮影 佐藤雅彦



はじめての探鳥会  
(ウトナイ湖)

2000.11.15

浜 恵子

鳥を見る。図鑑を見る。どれも同じに見える。見比べようと思う。もう鳥はいない……聞いた方が早い。「あれは何ですか」「オナガガモですよ」「ヒドリガモ・ホオジロガモですよ」今まで一律「カモ」と言ってきた鳥に初めて名

前がついた。「冬になるともっと尾が長くなるのですよ」確かに図鑑の姿と違う。

「エリマキシギよ！」皆さん興奮している……珍しい鳥なのね。襟巻きしていないのにどうしてエリマキシギなの？「それはね、夏にこういう姿になるんですよ」見せて下さった図鑑の姿にびっくり。冬に襟巻きすればいいのに。忘れられない名前となった。

「チュウヒがいるよ、見てごらん」一人では絶対発見できない対岸の林にいるのをスコープで覗かせて下さる。どうやって見つけるのだろう……。

双眼鏡を買った。レンズいっぱい鳥の顔を入れてみる。見てしまった、細長い鼻の穴。口の中のアゴと舌。瞬きす

る時、下の方から閉じるのを(膜があるとか)。耳はどこ？  
んん 目が合ってしまった。向こうもこちらを観察して  
いる。警戒心はないのかな。

拡大すればますます美しい。天然色素がこんなに鮮やか  
とは。艶やかな羽、精巧な模様、手抜きがない。たくまし  
さを感じるのは筋肉のせいかしら。

足下にも注意、犬のウンチがいっぱい。「それは白鳥の  
フンですよ」ええ！！

とにかく、発見いっぱい探鳥会でした。

初心者の方皆さんにお薦めします。探鳥会に行きましょう。  
親切に教えて下さいます。ありがとうございました。

〒099-0408 遠軽町留岡34

【記録された鳥】 カイツブリ、トビ、オジロワシ、チュウ  
ヒ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒ  
シクイ、マガン、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、オカヨシ  
ガモ、マガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、  
スズガモ、ホオジロガモ、カワアイサ、エリマキシギ、オ  
オセグロカモメ、ユリカモメ、カワセミ、ハクセキレイ、  
エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、カワラヒ  
ワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス 以上32種

【参加者】 板田孝弘、今村三枝子、岩崎孝博、岡田幹夫、  
川崎賢一、川村宣子、小堀煌治、小山久一、佐藤正秀、佐  
藤、白澤昌彦、田中哲郎、田宮ひろ子、戸津高保・以知子、  
富田寿一、中正憲信・弘子、成澤里美、浜 恵子、樋口孝  
城、三船喜克・幸子、村田静穂、山口和夫、山田良造、鷺  
田善幸 以上27名

【担当幹事】 富田寿一、樋口孝城

## 野幌森林公園の探鳥会に参加して

2000.12.3 田宮ひろ子

曇りでしたが、風もなくあまり寒くもなく穏やかな日で  
した。集合の時刻となり集まっていると、「あっ、ツグミ  
が飛んでる」という声、見上げると何羽か飛んでいました。  
飛び方でも鳥がわかるとまず学習しました。

「それではいつものコースを歩きます」と散策路の一本  
筋を一行になって歩き出しました。エゾユズリハコースに  
入って観察しながら歩きます。歩き出してすぐエゾリスが  
ちょこちょこ走って歓迎してくれました。「アカゲラがあっ  
ちにもこっちにもいるよ。」というところで、事件が発生。  
「アッ、フクロウがいる。」「えっ、どこ?」「どこ?」と  
皆がいろめきたちました。何と木と小枝の間に、木と同じ  
色のフクロウが、隠れているというか鎮座しています。それ  
も高いところではなく大体目線ぐらい。なかなか気付か  
ないと思います。会えてうれしいと喜色満面の人もいて、  
私にはビギナーズラックかも……。

キバシリは早い動きで確認できず、キクイタダキはどう

もあれらしいと見ただけでした。湿地の白樺の大木にマヒ  
ワがいました。高くて遠くてあきらめかけたとき、望遠鏡  
を見せてもらいました。胸の黄色が輝いて目元にとびこん  
できました。

冬以外は時々野幌を散策していましたが、目線はまっす  
ぐかやや下、季節の移り変わりをそれなりに楽しんでいま  
した。が、顔が完全に上向く程見上げたり、木々の向こう  
を透かしてみると、まだ知らない広がりがあることに気が  
つきました。声のする所を見上げては遠く、やっとな姿を確  
認できても、ポケットから図鑑を取り出して捜そうとして  
もずっとそこにいてくれるはずもなく、野鳥は私にとって  
近くて遠い存在でした。でも探鳥会に参加すると身近にい  
ろいろな鳥がいることがわかりました。最後の野鳥チェッ  
クするとき、チェックをしながら見落としている鳥のなんと  
多いことか。人の指差した先を素早くとらえられるよう  
になりたいと思いました。

〒004-0053 札幌市厚別区厚別中央3条2丁目

12-35-502

【記録された鳥】 トビ、ハイタカ、オオタカ、ノスリ、マ  
ガモ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨ  
ドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒ  
ガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、  
マヒワ、ウソ、ムクドリ、ハシブトガラス 以上23種

【参加者】 林 洋子、香川 稔、松原寛直・敏子、二川敏  
幸、長谷川涼子、道場 優・信子、中正憲信・弘子、岩崎  
孝博、橋爪陽子、沢田浩一、栗林宏三、久志本アイ、川上  
秀幸、村上トヨ、戸津高保・以知子、田宮ひろ子、小堀煌  
治、長尾由美子、高橋良直、今村三枝子、船越昭則、長谷  
川佳代子、山口和夫、岡田幹夫、渡辺好子、山田良造、後  
藤義民、内山正裕、井上公雄 以上33名

【担当幹事】 栗林宏三、戸津高保

## 祝津海岸・小樽港探鳥会

2001.1.21 竹内悦子

私にとっては、この冬初めての海鳥ウォッチングです。

小樽駅前を出発した時に降っていた雪も、祝津に着いた  
ころにはやんでいて、時折日も差すようになりました。

一年ぶりの海鳥は、スコープに入れることはできても、  
それが何という鳥なのか自信がなくて、ついそばにいる大  
先輩の梅木さんなどに頼ってしまいます。まず見つけたの  
は、ハシブトウミガラスだと分かりました。ウミガラスよ  
りも顔のあたりがかなり黒く、なるほど、図鑑と見比べる  
うちにだんだんと思い出してきました。首のあたりが白く  
て長い鳥がいて、シロエリオオハムと思い、しばらく見て  
いたのですが、最後の鳥合わせの時、シロエリオオハムの  
名が上がりませんでした。オオハムとの違いは「鳥630図

鑑」で見ると、水面から少し見える脇の白い部分があるかどうか判断の一つとなっています。私にはその白い部分が無いように見え、シロエリオオハムとっていました。冬の高鳥はたいがいモノトーンで、いつも識別のむずかしさを痛感します。

初めてバードウォッチングに参加した時のことを思い出します。秋の初めでしたが、アオジという鳥を教えてもらっても、私にはどうしてもスズメにしか見えませんでした。数年過ぎた今、アオジの胸の黄緑色のきれいさがスズメには無いというのが分かりますが、冬の高鳥のように特に識別がむずかしい鳥は、とにかく足繁く通って海をのぞくということに尽きるようです。寒さとの根比べも加わりますので、これがなかなかむずかしいところですよ。

高島漁港に1月始めから珍鳥のハシジロアビが出ているという情報があったので、期待していたのですが、会えなくて残念。

ハヤブサがしょっちゅう上空を飛び回ってくれて、寒さも時折忘れてしまう楽しい探鳥会となりました。

〒046-2671 小樽市オタモイ1-16-4

【記録された鳥】オオハム、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、マガモ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、トビ、オジロワシ、ハヤブサ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミガラス、ハシブトウミガラス、ケイマフリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上29種

【参加者】和田和子、岩崎孝博、五十嵐美保、板田孝弘、伊藤恭子、伊藤聖子、大町欽子、大滝和磨、大滝洋子、岡田幹夫、加藤花子、亀井厚子、岸谷美恵子、北山政人、栗林宏三、小須田秀子、鈴木繁雄・英子、佐藤幸典、佐々木充人、齊藤昌子、品川睦生、白澤昌彦、高橋良直、武沢和義、戸津高保・以知子、道場 優、中矢篤子、中正憲佑・弘子、成澤里美、西永之恵、久野裕之、樋口孝城・陽子、前田秋子、松本美智子、三船幸子、村上トヨ、山本昌子、山口和夫、雪田昭治・久子、吉野智生、渡辺吉宗・好子、佐々木友子、新妻 博

以上49名

【担当幹事】梅木賢俊、白澤昌彦、栗林宏三

### 野幌森林公園

2001. 2. 4 戸津高保

晴れてはいたが風の強い寒い日でした。集合場所の大沢園地近くにある例の大木にフクロウが姿を見せてくれました。

しばらくフクロウを観察してから、冬コースへ出発。

あちこちでカラ類やキツツキ類を見ながらの歩きです。大沢園地へ行く途中の高木でマヒワが3羽餌をとっています。

大沢園地に着き、皆なで一息入れていると上空を低くオジロワシが飛びました。帰りの桂コースでもう一度オジロワシが現れました。青い空をバックにゆったりと飛び、尾の白さがあざやかでした。

野幌を歩くと、私はつい昨年亡くなった、愛護会の大先輩である野口正男さんを思い出します。野口さんは、知る人ぞ知る“聞きなし”の名手で、野幌例会にはよく参加されました。私もずいぶん鳥の鳴き声を教えてもらいました。キバシリの囀りは、期間も短く、なかなか聞くチャンスが少ないのですが、何年か前の春、野幌で一緒にキバシリの囀りを聞き、野口さんが喜んでいたので、なつかしい思い出です。もう一緒に野幌を歩けないのは残念です。

〒062-0911 札幌市豊平区旭町4丁目1-14

【記録された鳥】トビ、オジロワシ、フクロウ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、マヒワ、ウソ、ハシブトガラス

以上16種

【参加者】松原寛直・敏子、齊藤正雄、白沢昌彦、大槻日出、後藤義民、高橋良直、久志本アイ、品川睦生、戸津高保・以知子、岩崎孝博、山口和夫、成澤里美

以上14名

【担当幹事】白沢昌彦、戸津高保

### 野鳥愛護会設立30周年記念誌 「私たちの探鳥会 30年の記録」発行について

当初は平成12年度内の発行を予定していましたが、諸般の事情で少々遅れています。現在最終的な段階にあり、もう少しです。会員の皆様には無料で配付いたしますが、郵送料などの関係から、次号の野鳥だよりと一緒に送らせていただくことになるかもしれません。どうぞご了承下さい。

30周年記念誌編集委員会

### 野鳥だより記事の訂正など

◎第122号表紙の発行年月日の日が抜け落ちていました。平成12年12月21日です。

◎第122号3ページ、写真説明のオオジュリンとアオジの左右が逆になっていました。著者の佐藤幸典さんにはご迷惑をおかけしました。

以上、お詫び申し上げます。

# 鳥民だより

## ◆総会のご案内

平成13年度の総会を次のとおり開催いたします。多数ご参加ください。

日 時 平成13年4月14日(土) 午後2時から  
場 所 札幌市民会館2号会議室  
議 題 平成12年度事業報告 同会計報告  
平成13年度事業計画 同予算案 ほか

## ◆野鳥写真展の開催と写真募集

日 時 平成13年5月8日(火)～5月28日(月)  
場 所 光映堂ギャラリー2階「ウエストフォー」  
札幌市中央区大通西4丁目  
☎ 011-261-0101

展示作業は5月7日午後5時30分から、搬出は5月28日午後5時30分から行います。出展ご希望のかたは写真をご用意のうえ、ご参加ください。なお昨年同様、デジタルカメラによるプリントも参加可能です。スチール写真は4ツ切り、デジカメ写真はA4サイズをお願いいたします。

写真の送付先は光映堂の小林さんまで。(住所は上記)  
問い合わせは小堀さんへ。☎ 011-591-2836  
(午後8時～10時まで 時間厳守のこと)

## ◆旭岳温泉一泊探鳥会のご案内

昨年のサロベツ・ベニヤ一泊探鳥会が大変好評でした。今年度は高山の探鳥会を企画しました。

旭岳温泉周辺ではホシガラス、ベニマシコ、カワガラスなど、ハイマツ帯ではギンザンマシコ、カヤクグリ、ノゴマなどが期待できます。1日目午後に温泉周辺で探鳥。翌日は5時から温泉周辺で早朝探鳥、朝食後姿見駅周辺を散策の予定です。番外として千鳥桜の花見が楽しめるかも知れません。

日 時：6月30日(土)・7月1日(日)  
集合場所・時刻：大通りNHK前  
午前7時20分集合、7時30分発  
宿 泊：大雪山白樺荘(☎0166-97-2246)  
会 費：16,500円(含：ロープウェイ料金・ユーカラ館入館料)  
(代金は当日申し受けます)  
定 員：45名(先着順)  
締め切り：定員になり次第  
申込み先：蒲澤宅 ☎011-663-9783  
4月1日午前9時より受付  
そ の 他：当日の昼食は持参して下さい。

## ◆新しく会員になられた方

嘉 藤 慎 譲 〒001-0017

札幌市北区北17条西5丁目20-303

地域環境計画内

## 北海道立野幌森林公園に 自然ふれあい交流館がオープンします

野幌森林公園の大沢口に自然ふれあい交流館がオープンします。

交流館では絵や写真を交えて公園内の自然を楽しく紹介しているほか、皆さんの作品を展示するふれあいギャラリーやちょっとした観察ができるようなコーナー、自然についていろいろ調べたりできる図書コーナーなどが設けられています。

公園を散策する前にちょっとした情報や知識を増やしたり、自然とのふれあいを通じて相互の交流を深めるとか、散策後の休憩場所などに利用できます。

また、交流館では皆さんに自然と親しんでいただくため、観察会などのいろいろな行事も予定されています。なお4月28日午前10時にオープンとなり、テープカットや記念講演が行われます。

日 時 平成13年4月28日(土) 10時から

場 所 野幌森林公園大沢口

(江別市西野幌685-1)

問い合わせ先 北海道野幌森林公園事務所

☎ 011-898-0455





☆探鳥会は、探鳥幹事を中心に行います。

野幌森林公園を歩きましょうの場合は、集まった方の中からリーダーを立てて行います。

☆余程の悪天候でない限り行います。

☆公共交通機関を利用される方は各自でお確かめください。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をお持ちください。

☆探鳥会の問い合わせ

自然保護協会事務所 ☎011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日・祭日を除く)

4月8日(日)	野幌森林公園を歩きましょう	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 めっきり春らしくなった明るい森の中を楽しみながら歩きます。赤い鳥いないかなあ…。	
4月15日(日)	野幌森林公園	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 夏鳥の到来を心待ちにしながら残雪の道を歩きます。カエルの卵塊も見られるかも。	
4月22日(日)	宮島沼	大富会館 午前10時集合
	中央バス(月形行) JR岩見沢駅前バスターミナル発 大富農協前下車 徒歩10分 例年にない大雪の本州で越冬した雁たちは体力を蓄えながらいよいよ北帰の途中、宮島沼へやって来ます。	
5月5日(祝)	藤の沢	白鳥園 午前9時集合
	定鉄バス(定山溪線) 藤野3条2丁目下車 徒歩20分 昨年春に開催されることになりました。山あいの道を散策しながらの探鳥です。	
5月6日(日)	野幌森林公園	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 いよいよ夏鳥の本格的な到来時季です。キビタキ・オオルリは来ているのでしょうか。	
5月13日(日)	千歳川周辺早朝探鳥会	勝化場手前橋付近 河川敷小公園 午前5時集合
	(早朝のため公共交通機関はありません) 朝食のご用意を。防寒装備は十分に。 川沿いの道は自然の宝庫。水面すれすれに飛ぶヤマセミの姿を確認できるかもしれません。	
5月20日(日)	鶴川	JR日高本線 鶴川駅前 午前9時30分集合
	道南バス(浦河行) 札幌駅前バスターミナル発 鶴川農協前下車 徒歩5分(長靴の用意を) はやい潮の流れが浜をやせさせ、ついに両岸ともに護岸工事が行なわれています。シギは来てる?	
5月27日(日)	野幌森林公園を歩きましょう	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 やっとメボソムシクイが到来する頃です。さてそのさえずりはジジロジジロ?それともジュリジュリ?	
6月3日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線 植苗駅前 午前9時10分集合
	JR千歳線 植苗駅下車 林の中の道をぬけ、草原の鳥を堪能しながら、湖畔へ向かいます。シマアオジも少なくなりました。	
6月10日(日)	東米里	東米里小学校正門前 午前9時集合
	市バス(米里線) 東米里小学校前下車 だんだん宅地化されてきてもわずかなスペースに草原性の鳥が残っています。とことん見守りつづけます。	
6月16日(土)	平和の滝 夜の探鳥会	平和の滝駐車場 午後6時30分集合
	市バス(西野平和線) 平和の滝入口下車 徒歩20分 あこがれのコノハズク・ヨタカの声が減ってきています。かなしげなアオバトの声も聞こえたりします。	
6月17日(日)	野幌森林公園を歩きましょう	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分 子育てに大忙しの頃。木の葉の影にエサをくわえた親鳥がいるかも。	
6月24日(日)	福移	福移入口停留所付近 午前9時集合
	市バス(北札幌線) 福移入口下車 開発局委託のシマアオジ調査が行なわれています。97年10羽以上。漸減し、2000年ついに0羽に。	

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287  
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465